

にもあらずとして、同音の好字をえらびて改められたりけむ、さるに古はたゞ夜麻登といふ名をのみむねとはして、文字はいかにまれ假の物なれば、よきあしきさたにも及ばず、あるまゝに倭の字を用ひ來にしを、や、後には、文字の好悪きをもえらばるゝ事になれりしなりけり、さて此和の字の事、上に引る漢書の文、又順貌と注せるなどに、和順など、もつゞくを合せておもへば、倭と字義も遠からず、また書紀の繼體天皇御卷の詔詞に、日本<sup>ヤマト</sup>邕々<sup>ヤハラギテ</sup>名擅天下云々とある、邕は誰と通ひて詩の大雅に誰々といふ註に、鳳凰鳴之和也とも、和之至也ともいへる、又聖德太子の憲法の首に、以和爲貴とある、又もろこしにて雍州といふは、もと王都の國の名なる故に、皇國にても後世にこれにならひて山城國を雍州といふ、此雍字も誰と通ひて、和也といふ註ある、これらみな由あれば、いづれにまれその義を取れたるかとも思はるれど、それまでもあるべからず、すべての事後に考ふれば、おのづから由ある事どもはくさくいでくる物なり、また子華子てふ書には、太和之國といふこともあれども、これらはさらに由なし、

倭をのの和の字に改められつるは、いづれの御代にかと考るに、齋部正通の神代卷口決に、天平勝寶改爲大和と見え、拾芥抄にも、天平勝寶年月日改爲大和とあり、これらは後世の書なれども、よりどころありげに聞ゆる故に、なほ古書どもを考へ見るに、まづ古事記はさらにもいはず、書紀にも和の字にかけることは見えす、續紀に至りてはじめて此字にかけること見えたり、これによりてかの天平勝寶とあるが、妄にもあらざることをおかつしりぬ、されども然改められたることはしるされず、故なほ委く彼紀を考ふるには、はじめのほどは倭の字をのみ書て、そのあひだには、和の字に書るは一つも見えず、元明天皇の御代、和銅六年五月の天命に、畿内七道諸國郡郷名著好字とあれども、これは改らずと見えて、其後も猶もとのまゝに倭字なり、さて聖武天皇の御代、天平九年十二月丙寅、改大倭國爲大養德國、同十九年三月辛卯、改大養德國依舊爲大倭